

はばたけ！ 女性研究者の育成に向けて

Fly High! Toward the Next Stage for Encouraging Female Researchers

大隅典子 Noriko OSUMI

現在、自然科学分野における女性研究者の比率は徐々に増加しつつあるものの13.0%であり、韓国(13.1%)にさえ追い越されている。この数字の低さは、国際比較(仏27.8%, 米34.3%)から見て異常に低いといえる。第3期科学技術基本計画では、研究を支える人材の多様化がイノベーションにつながるとして、国は女性研究者の活躍促進を行わなければならないとし、女性研究者の採用割合の目標を自然科学系全体で25%(理学系20%, 工学系15%, 農学系30%, 保健系30%)と定めた。この実現のために、「特別研究員事業(復帰支援)」(日本学術振興会)などを含め、平成18年度からいくつかの施策が開始された。「女性研究者支援モデル育成」(科学技術振興調整費)は、優れた女性研究者がその能力を最大限発揮できるようにするため、大学や公的研究機関を対象として、女性研究者が研究と出産・育児等を両立するための支援を行う仕組みを構築するモデルとなる優れた取組を支援するものである。平成20年度は合計33機関における取組が進んでいる。

東北大学は、初代総長澤柳政太郎の「門戸開放」主義により、大正2年(1913年)に、黒田チカ、丹下ウメ、牧田らくの3名を当時の帝国大学の学生として受け入れたという歴史を有する。時代は下り、平成13年度に男女共同参画委員会を全学の常置委員会として設立し、平成14年には「男女共同参画のための東北大学宣言」が総長より発表され、共同参画に対する取り組みを全国の大学に先駆けて開始したが、東北大学は「超理系大学」であり、85%の教員が自然科学系であるために、東北大学における男女共同参画を進めるためには、理系分野における取り組みがさらに必須であった。

このような背景のもとに、東北大学の女性研究者支援モデル育成事業「社の都女性科学者ハードリング支援事業」が開始された。東北大学のモデル事業では1) 育児・介護支援、2) 環境整備、3) 次世代支援の3本の柱を立て、活動を展開してきた。1)の育児・介護支援

では、子育て中の教員に研究補助を行う支援要員を配備し、またベビーシッターの経費を補助しており、2)の環境整備では、女性用休憩室の整備を進め、東北大学病院内の病後児保育施設を全学に開放できるように拡充しつつある。通常の保育園は病気が完全に治ってからでないといけないので、東北大学病院ではこれまでも独自に「星の子ルーム」という「病後児保育室」を運営し、保育士と看護師を配備することにより回復期にある子供を預かってきた。このような施設の要望も多かったので、平成18年度からはモデル事業の支援を受けて全学に解放し、利用者数が倍増した。

とくに東北大学としてユニークな取り組みは、3)の次世代支援のための「サイエンス・エンジェル制度」である。これは、毎年約50名の自然科学系女子大学院生を「サイエンス・エンジェル(以下SA)」として任命し、母校や科学館等においてセミナーや実験デモ等を行うことを通じて、より若い世代に対し身近なロールモデルとして活躍してもらおうという取り組みである。母校出張セミナーや地域の科学館などにおける科学展示のサポーター・ナビゲーター等の活動を展開しつつある。多岐に渡る自然科学系分野から選ばれたSA同士の交流により、SA達が将来、どのような異分野融合研究やイノベーションを生みだしていくかも楽しみだ。

だが、最大の難関は採用時における女性比率の向上であり、こちらはなかなか進まない。平成21年度からは、「女性研究者支援システム改革加速プログラム」が同じく振興調整費により開始する。こちらは、とくに改革促進が求められている理・工・農の分野における女性研究者の育成プロジェクトであり、私達もその申請に向けて準備を進めている。このような施策により、日本全体としての意識が高まることを期待したい。

参 考

東北大学女性研究者育成支援モデル事業：

<http://www.morihime.tohoku.ac.jp/>

科学技術振興調整費平成21年度新規課題公募要領：

<http://www.jst.go.jp/shincho/21koubo/21program.html#2>



大隅典子 Noriko OSUMI

東北大学大学院医学系研究科・教授
歯学博士

1988年東京医科歯科大学大学院歯学研究科修了。
1988年同大学歯学部助手、1996年国立精神・神経センター神経研究所室長を経て、1998年より現職。2006年より総長特別補佐(男女共同参画担当)。2008年より東北大学ディスティングイッシュトプロフェッサー。日本学術会議第20期および21期会員。
専門は発生生物学、分子神経科学。

2005年より科学技術振興機構の戦略的創造研究(CREST)の代表者として「ニューロン新生の分子基盤と精神機能への影響の解明」に従事。2007年より文部科学省グローバルCOE代表として「脳神経科学を社会に還元する教育研究拠点」を率いる。著書に『神経堤細胞』(共著、東京大学出版会、1997年)、人体発生学(分担、南山堂、2003年)、訳書に『心を生みだす遺伝子』(岩波書店、2005年)、『エッセンシャル発生生物学第2版』(羊土社、2007年)など。ナイスステップな研究者in 2006を科学技術政策研究所より授与。